

基礎看護実習 I 段階に関った看護職者の実態と意識調査

高橋方子, 竹本由香里, 丸山良子

宮城大学看護学部

キーワード

看護職者, 臨地実習, 実態, 意識

nurse, clinical practice, circumstance, attitude

要 旨

本研究は基礎看護実習 I 段階に関する看護職者の関りの実態と実習に対する意識について明らかにすること目的に行った。実習を受け入れている病棟の看護職者を対象に質問紙による配表調査を行い171名のデータについて分析を行った。その結果以下のことが明らかになった。

1. 看護職者が学生と関った平均日数は 1.7 ± 0.9 日であり, 学生の記録物を読む機会がなかったものは90.6%だった。学生カンファレンスへの参加は15.4%だった。
2. 学生に対する評価は74.1%の看護職者が学生は患者に熱心に関っていたとしていた。
3. 看護職者に学生自身からアピールする必要がある質問や自分の行動計画を伝える事についてよい評価をしている看護職者は50%以下だった。
4. 実習指導に関ることによる看護職者の成長については, 「学生と関ること自分自身の看護を振り返る機会になる」と回答したものが最も多く71.1%だった。
5. 実習指導に関ることによる看護職者の負担に関しては, 「業務に支障をきたす」と回答した者が最も多く51.4%だった。

A Survey of The Circumstances and Attitudes Relating to Nurses Who Instruct Nursing Students

Masako Takahashi, Yukari Takemoto, Ryoko Maruyama

Miyagi University School of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to clarify the circumstances and attitudes related to nurses who instructed nursing students in clinical practice. A questionnaire was administered to 171 nurses. The findings were as follows:

1. The mean number of days that the nurses instructed the nursing students was 1.7 ± 0.9 day. Of these, 90.6% of the nurses did not have the opportunity to read the students' practical records, but 15.4% participated in the students' post-practical conferences.
2. The nursing students' attitudes toward patients were considered earnest by 74.1% of the nurses.
3. Less than 50% of the nurses believed that the nursing students could not properly convey their questions and plans to the nurses.
4. Teaching the students enabled the nurses themselves to better understand nursing, according to 71.7% of the respondents.
5. Instruction of the nursing students was felt to interfere with other work by 51.4% of the nurses.

I. はじめに

臨地実習は学生が学校で学んだ知識や技術について統合する、あるいは受持ち患者への援助を通して人間的な側面を成長させるなど看護教育の中で非常に大きな役割を果たしている。学生にとって学びの多い実習を行うためには学校と臨床の協力は不可欠であり¹⁾²⁾、中でも学生に関する看護職者の役割は大きい³⁾⁴⁾。当大学の基礎看護実習においても、実習は学生が看護職者の様々な看護場面を見学することから始まり、学生の受持ち患者が決定した後は、その患者を担当する看護職者とともに看護の展開を行うというように広く看護職者に関する実習形態をとっており、学生に関する看護職者の果たす役割は重要である。これまで実習に関した看護職者の実習に対する意識に関しては、指導上の問題や指導に対する達成感⁵⁾⁻⁸⁾、指導者の実習に対する関心と影響する要因⁹⁾⁻¹³⁾について検討がなされている。臨地実習が行われることで看護職者は通常の業務の他に学生の指導が加わり、身体的にも精神的にも大きなエネルギーを費やす状況におかれることになる。しかし学生に関することに対する看護職者の負担に関する検討や、学生に関した看護職者も学びを得ていると述べるものは多いにも関わらず⁵⁾¹⁰⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、具体的な学びに関する検討は少ない¹⁶⁾。また、看護職者の学生に対する関りの実態に関する資料はほとんど見当たらない。臨床との協力体制を築いていくためには、「教育とはともに成長するものである。」ということ踏まえ、学生だけではなく実習に関した看護職者の学びや負担についても検討される必要があると考えられる。本研究は基礎看護実習 I 段階に関する看護職者の関りの実態と実習指導を行うことでの影響に対する意識を明らかにし、臨床とのよい連携について検討するための基礎資料とすることを目的に行った。

II. 研究方法

1. 調査対象及び調査方法

当大学の基礎看護実習 I 段階（以下基礎実習）を受け入れた病棟の看護職353名に対して質問紙による配表調査を行った。調査期間は基礎実習(2001. 2. 27~3. 2) 終了後から1週間であった。実習を行

った学生数は95名だった。322名から回答があり(回収率91.2%) その内、実習に直接関ったと回答したもの171名(53.1%)のデータについて分析を行った。

2. 質問紙について

質問紙は2000年10月に実習指導者講習会を受講し臨床実習指導経験のある35名に行った「臨床実習指導に関ることでの学びと好ましくない影響についての調査結果」、及び基礎実習に関した看護職2名への半構成面接内容、ETCB (Effective Teaching Clinical Behavior)¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾をもとに作成した。質問紙の内容は、対象者の属性、実習への関りの実態、学生の評価、看護職者自身の学生への関り方、実習に対する認識、病棟全体に及ぼす影響に対する認識についてであった。各質問に対しては、そう思う、まあまあ思う、あまり思わない、全然そう思わないの4段階評定で回答を求めた。また、学生に関ること自分自身が成長したこと、負担になったことについて自由記述で回答を求めた。

3. 分析方法

各質問項目について単純集計を行った。また自由記述による回答は、意味内容の区切りごとをデータとし、研究者2名それぞれがその類似性により分類を行った。さらにその結果を持ち寄り、照合、比較、検討し分析を行った。

III. 結果及び考察

1. 対象者の属性

対象者の属性は表1に示した。対象者の平均年齢は 30.1 ± 8.7 才、平均臨床経験年数は 8.7 ± 8.5 年であった。

2. 基礎実習への関りの実態

基礎実習の目的を知る手段は、「説明会に参加した人から聞いた」が最も多く28.7%、ついで「実習要項を読んだ」26.2%、「説明会に参加した」が5.5%だった。「その他」と回答したものは39.6%だったが、その内訳は「婦長・主任・指導者から説明を聞いた」7.9%、「他のスタッフから聞いた」3.0%、「学生から聞いた」3.7%、「目的を知らない」10.4%、「その他」15.2%であった。(図1)

表1 対象者の属性 n = 171 (%)

性別	男性	6 (3.5)
	女性	164 (95.9)
	無回答	1 (0.6)
年齢	21～29歳	100 (58.5)
	30～39歳	31 (18.1)
	40～49歳	22 (12.9)
	50～59歳	6 (3.5)
	無回答	12 (7.0)
子供の有無	なし	126 (73.7)
	あり	40 (23.4)
	無回答	5 (2.9)
経験年数	3年未満	52 (30.4)
	3～5年	33 (19.3)
	6～10年	28 (16.4)
	11～20年	30 (17.5)
	21年以上	18 (10.5)
	無回答	10 (5.8)
職位	スタッフ	152 (88.9)
	主任	8 (4.7)
	婦長	7 (4.1)
	無回答	2 (1.2)
教育課程	看護専門課程2年	29 (17.0)
	看護専門課程3年	109 (63.7)
	看護短大・大学	24 (14.1)
	無回答	9 (5.3)
指導者講習会受講の有無	あり	36 (21.1)
	なし	134 (78.3)
	無回答	1 (0.6)

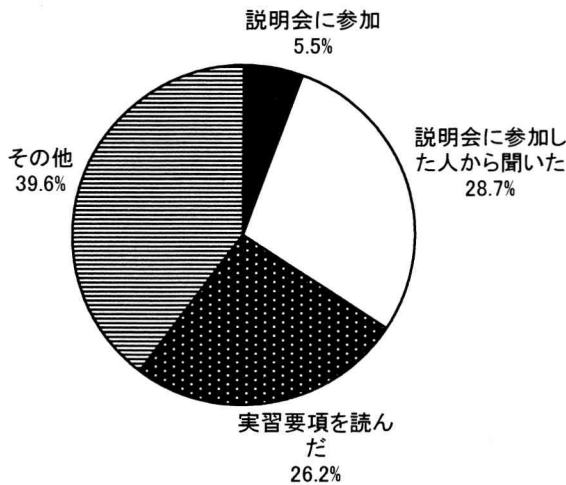


図1 実習目的を知る手段

実習方法を把握する手段は最も多いのが「説明会に参加した人から聞いた」30.4%、ついで「実習要項を読む」が26.2%であった。また「その他」の内訳は、「婦長・主任・指導者から聞いた」12.2%、「他のスタッフから聞いた」3.7%、「方法を知らない」5.5%、回答なし15.2%だった。(図2)

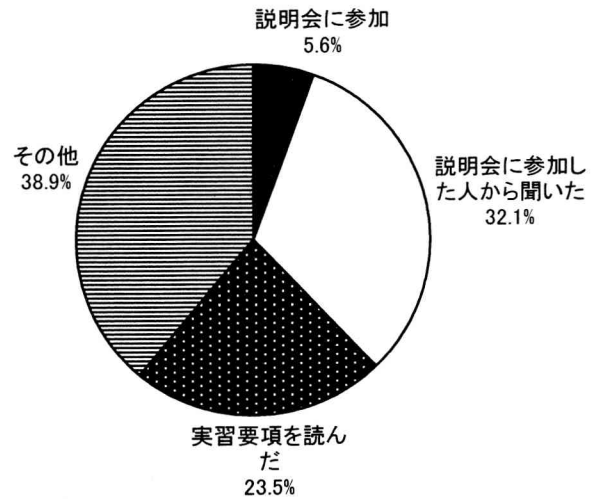


図2 実習方法を知る手段

実習指導に関する立場についてはスタッフナース87.4%で指導者12.7%だった。指導者の職位はスタッフナース57.1%、主任または婦長38.1%だった。学生と関った日数では最も多いのが1日で50.6%、ついで2日29.0%で、平均では1.7±0.9日だった。(図3) 学生の記録物に関しては90.6%が「読む機会がなかった」と回答していた。他は「毎日の行動計画を読んだ」5.8%、「行動計画を読んだ」3.5%だった。カンファレンスへの参加は15.4%で、参加回数の平均は0.3±0.8回だった。(図4)

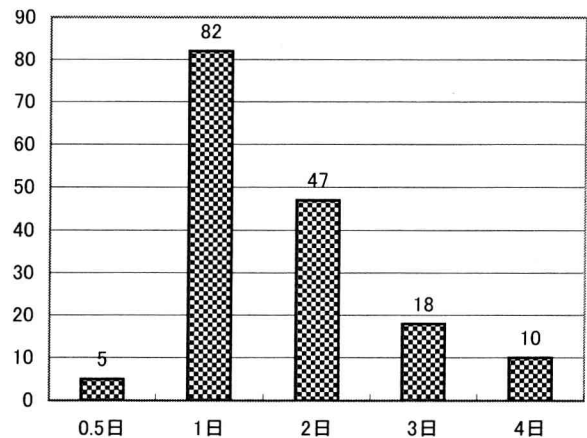


図3 学生と関った日数

基礎実習の目的や実習方法を把握するために、大学側から直接説明を聞くものは少ないが、多くは自分以外の人から聞いて把握する、あるいは自分で実習要項を読むという手段がとられ、臨床側は基礎実習を受け入れるための体制作りを行って

いる事が明らかになった。その一方で直接学生に関った看護職者でも、目的を知らないものが10.4%、手段について知らないものも5.5%おり、多忙でもあり勤務交代もあるスタッフが基礎実習に関心を持つような働きかけが必要であると思われた。また、看護職者が基礎実習の全期間（4日）を通して関る事は少ない状況であり、ほとんどの看護職者は学生の記録物に目を通したりカンファレンスに参加する機会が少なかった。看護職者と学生との関りは場面的なものであり、多くの看護職者が広く浅くという形で関っている状況が明らかになった。

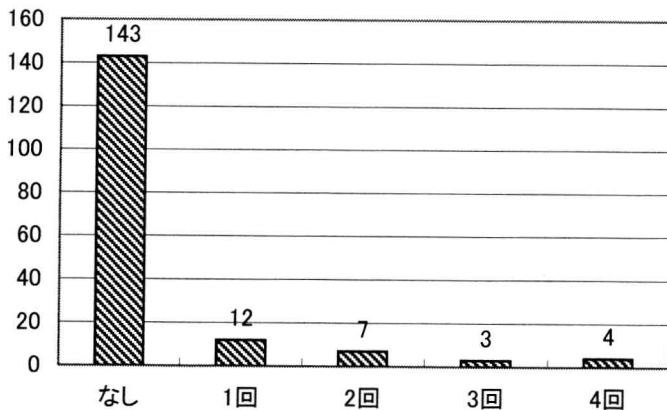


図4 カンファレンスに参加した回数

3. 看護職者の学生に対する評価

『学生の実習態度は熱心だったか』については「そう思う」「まあまあ思う」と回答したものをあわせると78.4%、『患者さんに熱心に関っていたか』は74.1%だった。『担当の看護職者に学生が自分の行動計画をきちんと伝えていたか』では「そう思う」または「まあまあ思う」と回答したものは49.1%、『学生が看護職者に積極的に質問を行っていたか』は35.9%だった。『学生がきちんと報告を行っていたか』は65.5%であった。(図5)

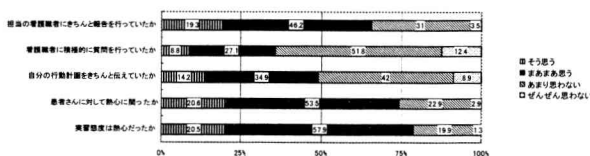


図5 看護職者の学生に対する評価

学生の実習態度や患者に対する態度については70%以上のものがおおむねよい評価をしているが、看護職者に学生自身からアピールする必要がある質問や行動計画については、よい評価をしているものは50%以下であった。学生にとって全く初めての実習であり、学生が自ら看護職者に自分の意志を伝えることは難しい状況があると考えられる。その中で報告に関しては、質問や行動計画よりはよいと評価する者が多かった。学生は看護職者に患者の情報を伝える必要性を理解しており、また看護職者も患者についての報告は聞かなければならないという意識も強いのではないかと思われた。

4. 看護職者の学生への関り方

『学生に関ることが好きか』では、「まあまあ思う」または「そう思う」と答えたものは44.7%だった。また、『気軽に質問をできる雰囲気を作っていたか』は69.6%、『理解ある関りを行っていたか』では66.1%、『学生が新しい体験ができるように配慮していたか』では64.4%、『学生とよい人間関係がとれていたか』では60.0%のものが「そう思う」または「まあまあ思う」と答えていた。『学生に対して看護職者としてよいモデルになっていたか』では、「あまり思わない」「全然思わない」と否定的な回答をしたものは74.9%であった。(図6)

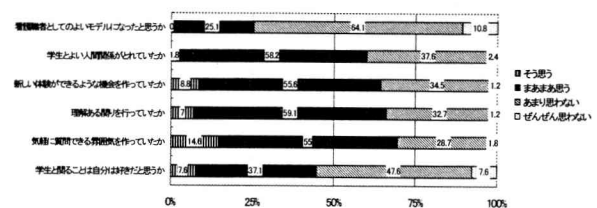


図6 看護職者の学生への関り方

学生に関ることについての感情では肯定的に回答するものの割合はやや少なかったが、看護職者の学生への関り方に対する評価はどちらかというといよい傾向にあり、看護職者は学生を受け入れようとしている姿勢が見受けられる。一方で、モデルとしての自分自身の評価は低かった。中西は「看護職者には自分が好むと好まざるとに関らずモデルとしての役割がある」と述べているが²⁰⁾、実際に学生が看護職者をモデルとしてどのように評価

しているのか、なぜ看護職者のモデルとしての評価が低いのか検討する必要があると思われた。また看護職者の実習に関する意欲に影響する要因として、指導者講習会受講の有無、経験年数、職位、労務管理に関する項目等が報告されているが¹⁰⁾¹¹⁾¹³⁾²¹⁾これらの要因との関連も検討する必要があると考えられた。

5. 看護職者自身の基礎実習に対する認識

(1) 基礎実習に関ることでのよい影響に対する認識

実習に関ることが『自分自身の看護を振り返る機会になったか』について、「まあまあ思う」または「そう思う」と答えたものは71.1%であった。『初心を思い出す機会になったか』では64.1%、『自分自身が勉強する契機になったか』では57.9%、『仕事上の意欲を高める機会になったか』では56.1%のものが「そう思う」または「まあまあ思う」と答えていた。『学生の発想が新鮮に感じられる機会になったか』では43.0%、『実習を通して最近の学生の看護教育内容を知る機会になったか』では44.7%、『若い世代を知る機会になったか』では44.5%のものが「まあまあ思う」「そう思う」と答えた。(図7)

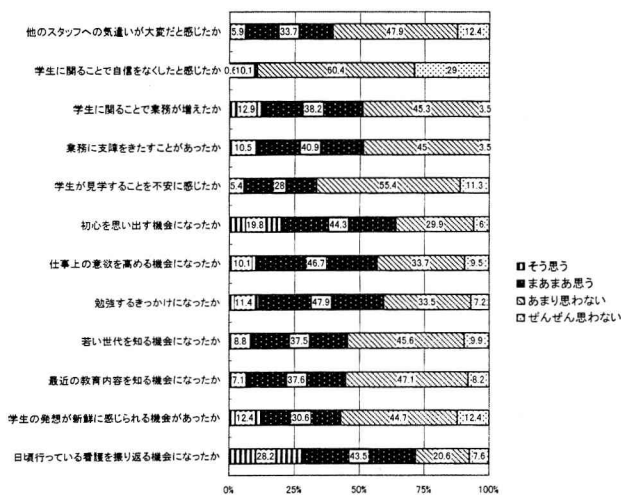


図7 看護職者自身の基礎実習に対する認識

自分自身の成長につながった点についての自由記述では53名(31.0%)から回答があった。その内容は、「自分自身の看護の振り返り」「学生を通しての学び」「教育的な関りに関する学び」「その他」の4つのカテゴリーに分類された。

さらに「自分自身の看護の振り返り」は「日常のケアの振り返り」「基本の確認」「理解していなかったことの気づき」「初心」の4つのサブカテゴリーに分類された。各カテゴリーの具体的な例は表2に示した。

実習に関ったことで看護職者により影響を及ぼす点は、「自分自身の看護を振り返る機会になる」と答えたものがもっとも多く70%以上、ついで「初心を思い出す」「自分自身が勉強する機会になる」「仕事上の意欲を高める機会になる」と答えたものが50%以上であった。これらの数字と自由記述の分析結果と合わせて考えると、関った看護職者全員ではないが、技術が未熟であり実習を行うことも初めての学生からでも看護職者はさまざまなことを学んでいる事が明らかになった。また、実習指導に関ることでの成長したことについての自由記述でも、自分自身の看護の振り返りについて述べたものが31名で最も多く、I段階の基礎実習で看護職者に及ぼすよい影響は、学生と関ることでの自分自身の看護を振り返る機会になることが大きいと思われた。

(2) 基礎実習に関ることでの負担について

『学生が見学することを不安に感じたか』については「そう思う」「まあまあ思う」と答えたものは33.4%であった。『自信をなくすことがあったか』では、「そう思う」「まあまあ思う」と答えたものは10.7%で少なかった。『他のスタッフへの気遣いがたいへんであったか』では、「そう思う」「まあまあ思う」と答えたものは39.6%、『業務に支障をきたすことがあったか』では51.4%、『業務が増えたと感じたか』では48.8%であった。

学生に関することで負担になった点についての自由記述は、68名(45.6%)から回答があり、「業務に関する負担」「学生に関する負担」「患者の負担」「指導に関する負担」「その他」の5つのカテゴリーに分類された。「業務に関する負担」は、「本来の業務以外のことが加わる負担」「時間外業務が多くなることでの負担」の2つのサブカテゴリーに分類された。「学生に関する負担」は「学生の行動、態度」「学生の知識・技術」「報告」「連絡」の4つのサブカテゴリーに分類され

表2 自分自身が成長した点

カテゴリー	回答者数	具 体 例
自分自身の看護の振り返り	31	<p><日常のケアの振り返り> (12名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の行う処置の目的を改めて振り返る機会になった。 ・学生に質問疑問を投げかけられ果たしてこれが本当に良いケアなのか、他にもっとよいケアがあるのではないだろうかなどと日常のケアの振り返りとなった。 <p><基本の確認> (8名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分流に行っていたケアや処置方法を基本に戻って再学習する機会になった。 ・看護用語や観察項目を確認することができた。 <p><理解していなかったことの気づき> (5名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生にわかりやすく説明しなければと思うと自分もあまり理解できていないことがわかり勉強になった。 <p><初心> (6名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の一生懸命な姿をみて初心を思い出した。 ・丁寧な言葉遣いやゆったりと話を聞こうとする態度から初心を思い出した。
学生を通しての学び	10	<p><自分とは異なった視点からの学び> (4名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の身になったり、そのような場合自分ではどうかと考えたりフレッシュな考えや思いが伝わった。 <p><学生と患者の関りからの学び> (6名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が患者と笑顔で接しゆっくりコミュニケーションをとっているのを見て、多くの患者を受け持っていると忘れてしまいがちだが大切な事だと思った。
教育的な関りに関する学び	6	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような働きかけをすれば学生自身が自分で気づいたり新しい考えを生み出してくれるのかを考える機会となった。 ・学生が大学で学んできたことを実習での体験と結びつけることの難しさを反省会にでて感じた。
その他	5	
合 計	52	

た。各カテゴリーの具体的な例を表3に示した。また「業務に関する負担」を述べたものは29名でそのうち20名が「従来の業務に別の業務が加わる負担」について述べていた。「学生に関する負担」を述べたものは27名でその中で最も多かったのが「学生の態度」に関する負担であった。

実習が行われることで精神的にマイナスになる感情を持つものは比較的少く、負担と思うものが最も多かった項目は「業務に支障をきたす」「業務量が増える」でその割合は50%前後だった。鈴木らが臨床実習指導者に行った調査でも臨地実習を負担に思うものの割合は55%であり²⁾、今回の結果も同様の傾向を示した。負担に関する自由回答は、「業務に関する負担」と「学生に

関する負担」が多かった。学生に関する負担では、「もう少し意思表示をして欲しい」「自分の考えや質問などをもっと積極的に言って欲しい」、指導上の負担では「行動目標が十分に把握できずどのように関ればよいのか悩んだ」のように学生の考えていることが関った看護職者に十分伝わらず、また継続して学生に関ることが少ないため学生の考えがわからないままに実習が終了している状況が予想された。このことは看護職者の学生に対する評価の中で実習態度、患者に対する態度や報告の評価に比べ、看護職者に学生自身からアピールする必要のある質問や自分の行動計画を伝える事に関しての評価が低いという結果と一致していると考えられた。

表3 負担になった点

カテゴリー	回答者数	具 体 例
業務に関する負担	29	<p><本来の業務以外のことが加わる負担> (20名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝にその日のスケジュールを立てていたが学生と関することで変更しなければならなかった。 <p><時間外業務が多くなることの負担> (9名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1つ1つ説明をして進めるので時間内に終わることができないことがあった。
学生に関する負担	27	<p><学生の行動・態度> (12名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最近の学生さんはコミュニケーションが苦手という方が多いようで、ケアを提供する時待っているとほとんど発語がみられず無言のままにひとつひとつの動作をしてしまう。 ・ただ一緒についてくるだけでは、どうしても業務が忙しい時は気遣えないのもう少し意思表示をして欲しい。 <p><学生の知識・技術> (7名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的な血圧測定ができず患者さんの測定に10分以上かかり、報告の時には自信がありませんと言われ再度血圧を測定した。 ・体位交換時どこに手をあててよいか全くわからなかった。 <p><報告> (4名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別の患者さんの処置等をしている時に報告されると困ることがあった。 ・学生の報告を待っている時間をもったいない。 <p><連絡> (4名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受持ち患者のケアをしようとした時に学生がいず、探しに行ったりすることがあり時間の無駄を感じた。
患者の負担	10	<ul style="list-style-type: none"> ・患者から容態聴取をしている時、後ろで立っているのは患者さんの負担になる。 ・患者さんの羞恥心が増したと思う (陰部洗浄)。
指導に関する負担	6	<ul style="list-style-type: none"> ・患者さんに声がけするようポイントをおさえて促すが、あまりに助け船を出しすぎてしまうと学生自身が自己嫌悪に陥ってしまい難しい。 ・学内で実習してきた方法と違うのではないかと不安に思うことがあった。
その他	13	
合 計	85	

看護職者と学生の人間関係は学生の実習に対する意欲に関係する要因でもあり²³⁾、効果的な実習を行うためには看護職者と学生との間のコミュニケーションは重要である。学生は看護職者に自分の考えを伝えることの大切さを理解し努力する必要があるし、逆に看護職者は学生が自分の意志を伝えることが大変であるというレジネスを理解したうえで関りが必要なのではないかと思われた。百瀬が指摘しているように、多くの実習で行動を起こせず消極的とみられる学生は試行錯誤をしていることも考えられ⁵⁾、教員は学生と看護職者の間を調整していく必要性

があると思われた。合わせて学生が何を考え、なぜそのような態度や行動にいたるのか、また学生に対してどのような働きかけを行うことが有効なのかさらに検討が必要であると考えられた。

6. 病棟全体に対する影響について

(1) よい影響についての認識

『病棟全体としてよい意味での緊張感が生まれたか』では63.7%のものが「まあまあ思う」「そう思う」と回答していた。『実習が行われることで業務の改善の必要性に気づくことがあったか』では「まあまあ思う」「そう思う」と答えたもの

は32.5%であった。さらに『業務改善につながったか』は12.5%と低い割合であった。『ケアの向上につながったか』では37.4%、『患者の情報で知らなかった情報を得ることがあったか』については37.4%のものが「まあまあ思う」「そう思う」と答えていた。(図8)

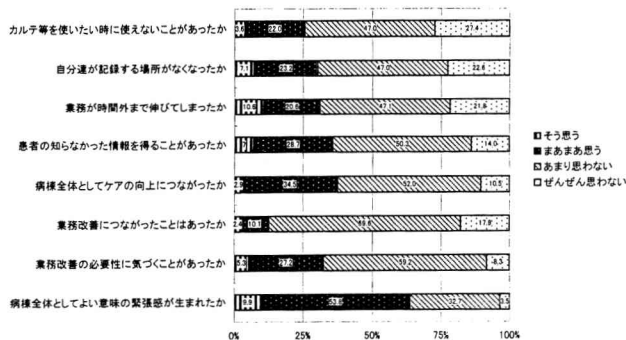


図8 病棟への影響に対する認識

病棟に対するよい影響としてはよい意味での緊張感が生まれるに対して肯定的な回答をしたものがやや多い。しかしケアの向上や業務の改善等に関して肯定的な回答をしたものは少なく、それほど業務に影響を及ぼしていないと思われる。

(2) 好ましくない影響についての認識

『病棟全体として業務が時間外まで伸びるか』では、「まあまあ思う」または「そう思う」と答えたものは31.2%、『学生がいることで記録をする場所がなくなるか』では31.0%、『カルテ等の資料が使いたい時に使えないことがあったか』については25.6%であった。

病棟全体としての好ましくない影響については各項目とも20%~30%台であり、学生の実習が病棟全体にとって非常に負担になっている状況ではないと考えられた。

IV. まとめ

本研究の結果から以下のことが明らかになった。

1. 看護職者が学生と関った平均日数は1.7±0.9日であり、学生の記録物を読む機会がなかったものは90.6%だった。カンファレンスへの参加は15.4%だった。
2. 学生に対する評価では74.1%の看護職者が、

学生は患者に熱心にかかわっていたとしていた。

3. 看護職者に学生自身からアピールする必要のある質問や自分の行動計画を伝える事についてよい評価をしている看護職者は50%以下だった。
4. 実習指導に関ることによる看護職者の成長については、「学生と関ることによって自分自身の看護の振り返りになる」と回答したものが最も多く71.1%だった
5. 実習指導に関ることによる看護職者の負担に関しては、「業務に支障をきたす」と回答したものが最も多く51.4%だった。

看護職者と学生との関りは短い期間でさらに場面での関りであることが明らかになった。看護職者は学生の考えを把握しにくい状況にあるため、学校と臨床が協力し効果的な実習を行うためには、学生と看護職者のコミュニケーションをいかに図っていくかが課題になると考えられた。

引用文献

- 1) 丸橋佐和子, 西山久美子, 丸山咲野, 伊藤好美, 武井陽子, 田辺真, 平田よし子, 中野栄子, 塩川睦子, 松本比佐江, 矢本美子: 学生を対象とした臨床実習における学習効果, 看護教育, 30(13), 1077-1082, 1993
- 2) Lynda Atack, Margret Comacu, Renee Kenny, Nancy Labelle, Debra Miller: Student and Staff Relationships in a Clinical Practice Model: Impact on Learning, Journal of Nursing Education, 39(2), 387-392, 2000
- 3) 草野ひとみ, 吉川千鶴子, 佐久間良子, 東辻ケイ子, 中嶋恵美子: 充実しなかったと学生が判断した実習の影響要因, 第30回看護学会論文集(看護教育), 164-166, 1999
- 4) 道脇真由美, 森本加代子: 臨床実習において学生自身の内面に変化を及ぼした場面の分析, 第30回看護学会論文集(看護教育), 164-166, 1999
- 5) 百瀬由美子, 小松万喜子, 柳沢節子, 小林千世, 楊箸隆哉, 坂口しげ子: 臨床看護実習における教員及び臨床指導者の学生指導に関する問題とその対策, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 22, 13-25, 1996

- 6) 服部鏡子, 粟田桂子, 鳥居芳江, 多田賀津子, 縄秀志, 平河勝美, 近田敬子: 臨床実習指導における看護婦の意識構造に関する研究, 第28回看護学会論文集 (看護教育), 94-97, 1997
- 7) 小林めぐみ, 白石令子, 花田妙子: 臨床実習における看護学生の存在に関する研究 I (看護婦と学生の認識の比較), 日本看護研究学会雑誌, 20(3), 344, 1997
- 8) 坂口けさみ, 松岡高史, 楊箸隆哉, 松岡高史, 西村尚志, 加藤憲二, 山崎章江, 小林千世, 柳澤節子, 関森みゆき, 森田孝子, 清沢研道: 臨床看護学実習における実習指導への関りと看護学生の学習課題に関する臨床実習指導者及び臨床看護スタッフの認識について, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 24, 1-13, 1998
- 9) 白石令子, 小林めぐみ, 花田妙子: 臨床実習における看護学生の存在に関する研究 II (看護婦の経験年数による認識の比較), 日本看護研究学会雑誌, 20(3), 345, 1997
- 10) 岩間みどり, 滝沢深雪, 山本和子, 山本時子, 瀬口ミツ子, 水田洋子, 山田保子: 臨地実習指導者の指導に対する認識, 第30回日本看護学会論文集 (看護教育), 30-31, 1999
- 11) 松井英俊, 佐藤敦子: 看護基礎教育における臨地実習に対する臨床看護婦, 看護師の関心, 第30回日本看護学会論文集 (看護教育), 27-29, 1999
- 12) 丹治和子, 斎藤チエ子, 早坂一子, 佐藤幸子, 津田裕子, 我妻信子, 清野睦美, 脇屋昇子: 看護婦と看護学生の関りの実態調査, 第29回看護学会論文集 (看護教育), 54-55, 1998
- 13) 松井英俊, 佐藤敦子, 貞広満里枝: 職位による役付き職員の臨地実習に対する関心, 第30回日本看護学会論文集 (看護管理), 168-170, 1999
- 14) 上野貴子, 北村愛子, 磯部ひろ美, 上田福久江, 浅川美智子: 病棟スタッフ全員が関る臨床実習指導体制とその評価, 第29回看護学会論文集 (看護教育), 51-53, 1998
- 15) 小松美穂子: 臨床とともに作りあげる臨床実習教育, インターナショナルナーシングレビュー, 23(5), 35-38, 2000
- 16) 村島さい子: 実習生の経験と向き合う臨床実習教育, 看護教育, 42(2), 94-103, 2001
- 17) Lani Zimmerman, Joan Westfall: The Development and Validation of a Scale Measuring Effective Clinical Teaching Behavior, Journal of Nursing Education, 27(6), 274-277, 1988
- 18) 石川ふみよ, 森千鶴, 千葉恭子, 奥宮暁子, 大西和子, 大淵律子, 小林伸子: 臨床看護実習における教員評価表の妥当性と指導体制の一考察, 東京都立医療技術短期大学紀要, 4, 77-90, 1991
- 19) 渡部節子, 坂梨薫, 目久田千恵子, 大山和子, 玉井稔子: 臨床実習指導に対する評価, 日本看護研究学会雑誌, 20(3), 208, 1997
- 20) 中西睦子: 臨床教育論, 初版, 289-294, ゆるみ出版, 1983
- 21) 竹下美恵子, 齋藤悦子, 伊藤幸子, 岩倉優実, 川口千穂, 高坂洋子, 角谷あゆみ: 臨床実習指導者のレディネスに関する研究, 第29回日本看護学会論文集 (看護教育), 129-131, 1998
- 22) 鈴木奈緒子, 伊藤千穂, 加藤圭美, 西尾和子: 看護婦・士の臨地実習指導に対するバーンアウトの構造, 第31回日本看護学会論文集 (看護教育), 158-161, 2000
- 23) 込田愛子, 満間信江: 看護学生の臨地実習意欲に影響する要因, 第31回日本看護学会論文集 (看護教育), 42-44, 2000